

天声人語

市川嵐監督の記録映画「東京オリンピック」に印象的な場面がある。聖火トーチが富士を背にもうもうと白煙を上げ、風にたなびく。さながら蒸気機関車のようだ。近年の五輪で見る地味めの聖火とは趣が違う▼「いまは環境重視。炎が小ぶりで煙も少ない聖火が主流です」と話すのは、日本工機（東京）の佐藤公之常務（62）。市川作品に収められた前回の東京五輪用トーチを製造したのは、同社の前身、昭和化成品だ▼開発当時、組織委員会から課されたのは「雨にも風にも消えない炎」「夕闇でも目立つ大量の白煙」との難題二つ。戦時中から砲弾を開発してきた同社技術者、門馬佐太郎氏が担当した。過去の五輪トーチを取り寄せ、薬剤を代えては燃やし、試走した。1千本を試作し、8千本を納めた▼社史によると、12カ国で延べ10万人余の走者が2万6千^{キロ}を炎でつないだ。「最後のランナー」が聖火台に点火した瞬間の興奮、無事に終了したときの安堵、全社員の強烈な思い出となつた」▼門馬氏は五輪の翌々年、出張の帰りに乗った旅客機が墜落して不慮の死を遂げる。だが技術は脈々と受け継がれ、改良型のトーチが札幌やサラエボの冬季五輪で使われたという▼福島県にある同社の白河製造所を訪ね、門馬氏が作った55年前のトーチに触れた。銀色の光沢を放つ聖火筒は見た目と違つてずしりと重い。戦中戦後を生きた砲弾技術者が注いだ精魂の重さのように思われた。来年のきょう24日、再び東京で五輪が幕を開ける。

2019・7・24